慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「自己」と「神」の間 : D. H. ロレンスの「新しい天地」における「他者」相見の意義について
Sub Title	A reading of D. H.Lawrence's "New Heaven Earth"
Author	海野, 厚志(Unno, Atsushi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1968
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.25, (1968. 3) ,p.148- 167
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	英語英文学・独語独文学特集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00250001-0148

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「自己」と「神」の間

—D・H・ロレンスの「新しい天地」[1]における「他者」相見の意義について—

海野厚志

I

D・H・ロレンスの比較的初期の作品に，「どうだ，おれたちは生きぬいたぞ」という詩集がある。長短あわせて65の詩から成り，出版は1917年である。しかしその大方は，1912年から13年の初めにかけて集中的に書かれたもので，彼の生涯における最初の危機と，その危機が転ぜられたところに開けた彼のいわゆる「人間一生の第六の光輝ある時期」を代表するもので，ロレンス理解の上で，この時期のもつ意味は極めて深刻且つ決定的であって，事実ここに語られる死と回生の事実とその目覚めの確かさとは，ロレンス一代の文学のいわば要をなすもので，ここに一指を置くことなくして彼をめぐるいかなる論議も所詮は，戯論の往来に過ぎぬばかりか，それの戯論なる限りにおいて，いかに多言多慮にわたり，真贋是非の沙汰の限りをつくそうとも，遂に相応せぬは必定であって，要はこの事実を帰所とも出所ともして，その往環上に吐き捨てられた夥しい言葉の多様に応接することなくして，ロレンスについて何事も語ったことにはならぬのである。

詩集は，「恋愛詩その他」「愛」に次ぐ第三詩集で，ロレンスと当時の恩師夫人との馳け落ち行(こう)を通じての二人の男女の壮絶な愛と憎しみの闘いの記録であり，また「生き抜いた」者の勝利の歌声でもある。しかし同時にこの詩集は，決してそれだけに停まらない。実は，その底流をなして「真

実の思想，議論でない単一な思想[3]」，自然によって贈られたものとしての「言葉[4]」，「一つの接触」であるところの「旋風[5]」が語られているのである。そして，これを更にこの詩集の内容に即していえば，「自己」と「他者」の問題であり，またこれと表裏をなして語られる「神」の問題である。

ロレンスといえば，その一代の生活と文学を通じて，一貫して彼の関心したものは，われであり，われというものの正体であった。即ち彼にとって生きるということは，その「われ」の何ものなるかという事であったし，その文学とて「自己を学ぶ[6]」という一事を遂に出ていないのである。彼が己れの芸術を「自己の為の芸術」と称した様に，彼の活動のすべてには，「自己の為の」がついてまわっているのであり，その「自己のための」という事は詮ずるに，「それ自身の為の」という意味であって，その経緯の明らかにされるところに，「為の」が消えて「自己」即「芸術」という意義があかされるのである。そして更にこの自己は，ロレンスにあっては，常に神と相応していて，自己の発見は直ちに神の誕生と別事ではないのである。

ところでロレンスのこの「自己」としての神の誕生は，それに先だって，そこに「古い神」の死がなければならなかった。彼の本格的な古き神との対決は極めて早く，ひとり早熟の天才にのみ許されるところとは云え自から「既に16才にして，キリスト教の教義を徹底的に批判し，超克して[7]」いたといっているのである。されば，その経緯を語る具体的な表現は，1913年1月に「息子等と恋人たち」への序として書かれた仮に「肉体[8]」論と呼ばれる一文であり，次いでこれと前後してものされた詩集「どうだ，おれたちは生き抜いたぞ」の，特に1914年以後に書かれた若干の詩片，それから第1次大戦勃発当初の1915年代に書かれた「王冠[9]」論および「トマス・ハーデー研究[10]」，そして更には，当初第3詩集「どうだ」のはしがきとして意図されながら現在では，「新しい詩のアメリカ版の序文[11]」として知られる一文などで，これらは，いずれもロレンスに依る「神は死せり」の検証手続きなのであるが，この「神の死」は，又，ロレンスにあっては直ちに「古い吾我」あるいは，「二次的自我」の死を意味し，

この古い吾我の死のところを直ちに「彼岸」とも「新しい天地」とも見つけることで，そこに「肉体」あるいは「本来の自己」を弁証しているのである。ニーチエにおいて「神の死」は，プラトン主義と結びついた二千年来のキリスト教の神である。即ちプラトン主義乃至，哲学は，イデヤを真実在と考え，感覚的事物を影とみなすことにより超感性的彼岸をたてて，それを真実の世界とみなし，現象的な此岸を仮象の世界とすることで，そこに二元的世界観を生み，それがやがてキリスト教と結びついて，まさに二千年余にわたり西欧思想の基本的性格を形作って来たものであるが——ロレンスが批判，克服したとなす神もかかる神の外ではないとして，ニーチェの場合果してそれが直ちに彼の自我の死となっていたかどうか。されば近代西欧における最も完全なニヒリストとして，一切の既成理念と諸価値を完全に否定し去り，その同道の先達であるドストエフスキーと共に，デカルトの「われあり」は勿論，カントの意識一般，ヘーゲルの意識における概念的自己把握の道も，専ら「地上存在者」のものとしてその哲学の全体をヘボ哲学にして無力と断じ去ることで，おのが地下生活の万才を叫び，自から地下生存者をもって認じながらも，結局その地下生活が「一番いいのではなくて，わたしの渇望しているのは，何かしら別のものまるっきり別のものだ」と嘆じ，「ただそれが発見出来ないのだ。地下などくそくらえだ」[(12)]と言わざるを得なかったあたり，当のドストエフスキーのみならず，「超人」の意志に固着して狂ったニーチェとても遂に己が最後の死を死んではいない。死なねばこそ狂えるのであり，従って神も又，彼の宣告の恐るべき真実にもかかわらず彼において尚，死に果ててはいない。「殺したのは我々」なればこそ，我々の手造りの神こそ死ね，「神」は，なお依然として死んではいない。意識の神こそ死ね，意識なる神は死んではいない。

この小論で以下我々の意図するところは，ロレンスの第三詩集「どうだ，おれたちは生きぬいたぞ」の中より「新しい天地」の一篇を採ってその各節各行について一つの可能な解釈を示すことを通して，例えばドストエフスキー，ニーチェの「地下室人」，「超人」あるいは，ボードレールの

「狂人」に代る，ロレンスの「本来人」乃至，「全人」発見の手続きを明らかにし，その「無我の人」にして純粋他者なる所以に説き及んでみたいと思うのである。次はこの小論が多少とも分明にしたい諸点である。

1. 「新しい天地」は，その最も本来的な意味で宗教詩であること。
2. この詩の全体がロレンスのいわば，「神は死せり」の宣言書であると同時に，例えば，ニーチェの「超人」の死の告知でもあって，マルクスの「プロレタリアート」，キルケゴールの「単独者」，ボードレールの「狂人」もこの例にもれぬこと。
3. この詩の一義的なテーマは，「死と復活」乃至は宗教的転身がそれであって，灰燼より回生し飛翔する作中の「おれ」なる不死鳥こそ，外ならぬ，ロレンスの神であること。

二

ロレンスの「新しい天地」というのは，まず何よりも「開(ひら)け」の世界である。開(あ)けた世界でも開(あ)けられた世界でもなくして，「開け」の世界である。自現，自照して既に「光」ばかりの世界である。それは，我々の絶えて知らない世界である。詩はそこで，まず主人公のこの別世界に超え出る全くの無作，受容の姿勢を示す。巻頭第1連3行がそれである。

1.

そこでおれは，おずおずと別世界に入っていく。自分の踏み入りたいと思うこの未知よりの招待を

畏こくも，ことわりかねて，

彼のこの「別世界」「この未知なる世界(くに)」は，彼の「踏み込みたいと希う」世界(くに)ではあるが，そこへの参入は，どこまでも「招待」によるのである。「ふみいりたいと希う」そのねがいは，彼のねがいで，彼が踏みこみたい，生れたいと希うのであるから，まさに彼の欲することに相違ないが，同時にそれは，どこまでも招かれてのもの，どうだ来んかと呼びかけ

られてのものである。「踏みこみたい」は彼の欲求に間違いないが，その欲求は，専ら呼びかけ，促しによるものである。「踏みこみたい」という意志，意欲は実は「促し」,「呼びかけ」としてのものであって，要は徹底おこさしめられたものであり，彼の所詮あづかり知らぬものである。されば人間の意志，意欲というものの構造は，例えば，「踏みこみたい」という場合，それは意志，意欲された，いわば結果であって，意志，意欲そのものは，意欲するものを超えその彼に関わらぬ「促し」あるいは「呼びかけ」そのものとしてのものだからであり，永劫彼を超えたる「知られざる」力の働き，即ち「促し」が意欲そのもの，意欲の正体だからである。従って彼は「おずおずと」ただ「畏くも」恐れ多いのである。ひたすらに己れを貧しうし，「放下」して招待を載くのである。ただ，「畏こみて」その呼びかけに答えるのみである。次の二連は，かくして立ち出でた別世界，彼にとってそれまで全く未知であった「新しい世界」,「知る者とて誰も居ない」欲求造作のわれに本来，「未知にてある世界」に立った主人公の踊躍歓喜するさまが歌われる。

おれは，実に嬉しい。この世界にたった一人，たった一人いて，おれは実に嬉しいのだ。
おれが，ようやく上陸した新らしい世界に居て，
おれは嬉しくて泣けたのだ，なぜっておれは，たった今
わけ入ったばかりの新らしい世界に居るからだ。
嬉しくておれは泣けたのだ。誰はばからず，そう，ここには知るものとて誰もおらぬのだ。

ここで「泣けた」[14]或は「泣くことが出来た」というように過去の表現がとられている点，注意を要する。彼が泣けたのは，先づ「今現にわけ入ったばかりの新らしい世界に居る」という事実あってのことで，「泣けた」ということは，この「今ある」あるいは「居る」という常に今という時で表わされる事実においてのことである。この事実が先行していての「泣けた」

である。更に「泣いた」と言わずに「泣けた」とする含み，乃至真意は，自分が泣く，泣いたということのうちに「泣かされた」「泣かせてもらった」という意義のあることをあかすものである。重要なのは，次の第一部，最終連である。

この未知の世界の未知の住人が誰であれ，彼らには，おれが彼らの間に乗り込んでいく，
そのうれしさに泣くわけが，とんと理解がいかぬだろう。
なぜなら，そのおれのやっているのは，依然として古い世界の身振りであって
彼らにはまるでよそのものである以上，わからぬだろう。

確かに彼の上陸した新らしい世界というのはまた，「未知の住人」の住む「未知の世界」で，主人公にもまして我々にも，絶えて未消息の界隅なのであるが，実はそれがそのまま「古い世界」を出ないのである。「何故ならおれのやっているのは，依然として古い世界の身振りであり，未知の住人である彼らとても，そのやっていることは，同じ古い世界の身振りであって」，同じ五体を同じ場に置いていることに変りはない。ただ問題は，その自分が，彼らにとって，「全くのよそもの」であることで，これはまた彼らが，この別世界にあっては，その当の「おれ」にとっても，「全くのよそもの」であると，同時に彼等自身，その彼等にとっても全くのよそものだということである。そして更につけ加えれば，「おれ」もまた，おれ自身にとってこれまで，皆目出会ったことのない，「とんと理解のいかぬ」他人なのである。要するに「たった今，わけ入ったばかりの新らしい世界」が，この日常的な波瀾の世界を寸分も離れず，「よそもの」が，またこの尋常悩転してやまぬ五体と余物ではないのである。しかも同時にこの世界，この五体にまるでかかわりをもたぬという。

さて次の第二部はあげて旧世界の消息である。方丈記のいわゆる「三界」[(15)]であって，「それ三界はただ心一つなり」「心一つ」でどのようにも変る世界である。

二，

おれは世界にあきあきしていた。

それを思うと虫ずがわく。

すべてのものが，おれ自身で染っていた。

空も木も花も鳥も水も

木，家，通り，乗物，機械，

国家，軍隊，戦争，平和会議，

労働，娯楽，政治，無政府，

すべておれで染っていた。おれは，はじめから，そのすべてを知っていた。

なぜなら，それもこれもおれ自身だったのだ。

考えてみると我々というのは，まことに不思議な生き方をしているものである。それが人間の不可避的な生きの条件であり，そのまま我々の生きるという事の全容量であり真実であって，そこに寸分の過不足もないに相違ないのであるが，しかも通常我々の見るもの，聞くもの，すべてが我々各自の有する感覚意識の機能の寸法，間尺にあわせてのものであって，すべてその機能の限界に彩どられており，「すべてがおれ自身で染った」ものである。避けがたく，己れの造作せるもののその果であり従ってまたそれ自身，全くの抽象でもある。しかも我々は，日常これを実体とも，現実とも思いなして，それとの懸命な格闘が演ぜられる。そして格闘は格闘を呼びそこに自他を含めて意識によって染めあげられた一つの途方もない仮象世界が構築される。すみずみまで己れの造作が産みなした世界，どこをとっても，己れの顔，己れの体臭が鼻につく，「思うと虫酸の走る」世界である。木といい，花といい，国家，戦争，労働，政治といい，これはすべて意識による世界の実体化であり，すべての「実体」あるいは「有」は，「おのれ」という「実体」の立った後の沙汰である。われをわれと意識せるところに顔が生じ，目鼻が生じ，その他その他の一切が生ずる。そのすべては既にそれのなきにあらねども，個々の目鼻は，これが目，これが鼻と，形と名を与えられるに及んで固体化され抽象化される。その形，その名の

表わすところ，その形名以前のものは，一切物の全体を尽して働らく当処として既に固定的実体をもたぬ。いわば働らきとして一切をつくしてある。それが目に極限され，鼻と呼称化されるに及んで，ものと化す。働きとして全体を尽くす現実，只どこまでも一事実としてのあり方が破られて「もの」，実体に変する。すべてがもの，我々の世界の一切が我々の感覚意識の造作の結果としてのものである。「みんなおれで染って」おり，そのすべてが自分の造作なれば，「そのすべてがわかる」のである。

おれが花をつむとき，おれは，おれ自身がおのれの花を摘んでいるのだとわかっていた
おれが汽車でいくとき，おれは自分自身の発明によって，おれ自身が旅するのだとわかっていた。
おれが戦争の砲声を耳にするとき，おれは自分の耳で，
おれ自身の破壊に耳を傾けていたのだ。
おれがひきさかれた死体を見るとき，おれは，それがおれ自身の
ひきさかれた屍体であることを知っていた。
すべてがおれだ，おれはすべておれ一個の肉において，それを知ってきたのだ

すべてを意識化するということは，恐ろしいことに相違ない。それは，己れを殺し，他を殺し，一切をものにしかえることだからである。「われ」，「吾我」，「二次的意識」の立つところ，すべてが己れ自身となる。われという主体も己れなれば，客体も己れであり，その己れ化した自他の両ながら意識の造作せる観念であり抽象であり，死物（もの）である。

このように，凡てを「己れの内において知る」己れを通して知る，意識化し，対象化して知るということは，意識の山，ピスガをその絶頂までつきつめんとする企てであって，これは直ちに，ハイデッガーのいわゆる「存在忘却の歴史」(7)に通ずる。そして現に，ニーチェは「超人」の意志によりピスガをまさしくその絶端まで登りつめて狂い，ドストエフスキー，また自意識の山にいどんで前人未踏の境にわけ入り，ヴァレリーまたボードレール，ポーに準じて自己自身の幾何学化，意識化に骨身をけずり，や

がてそこに発見した己れの「狂人」を同じピスガの天辺まで追いつめるが，結局ゆき暮れて路傍の石に坐し，只「待つ」ことをのみ余儀なくされるのである。

詩の第3部は，かくしてこの意識化，対象化の果てに来る恐怖のことが語られる。

三，

おれは，すべてが自分であるとき，最後に来る偏執狂的恐怖を
決して忘れることはない。おれは既にそのすべてを知っていた。おれは，自分の魂の中で，そのすべを予期していた。
なぜならおれは作者であり，結果であった。
おれは神であると同時に被造物だった。
造物主としておれは自分の創造をながめた。
造られたるものとして，おれは造物主たるおのれ自身をながめた
それはつまるところ偏執狂の恐怖なのだ。

おれは恋人として，自分の愛する女にくちづけした
そしてまた憎悪の神としておれ自身にも口づけしていた
おれは子供らの父であり，彼らを産みつけたものであった。
おお，おお，ぞっとする。おれはおれ自身の身体の中に子を産みつけ，みごもっていたのだ。

これは，いかにも怪奇な世界である。既に一切をおのが理性により対象化し，分析化し，理解しうるものとする理性主義者は，おのが意識をその極北にまで追いたてる。彼は，意識をもって意識をねらう。彼においては，ねらいながらそのすべてが予期されている。おのが尾を食む蛇[19]の類で，おのれの尾を食(くら)い，頭を食った口が更にその同じ口を食らうという次第で，自分が，「自分自身にくちづけする」くらいはもののかずではないのである。意識の本領は，一切を対象化し，抽象化することにある。従って自からも，その対象たるは必定なのであるが，しかもその時は，既に意識は結

果であり，抽象であって，抽象は最早意識ではない。意識の抽象は死，抽象の意識またこれ死，「遂に死が，申分ない死」がやってくる。しかし人は，多くこの意識の死に耐えぬ。その前に如実血管が血をふく。人は，こうして，あるいは極まって狂徒となり，行きくれては，知識，情識の僕となる。

我々に，いわば生存の条件としての不可避なる意識冒険の道は，常に結果によって自己を限定し，抽象化してやまぬその意識の道の道中に死んで，そこを直ちに道元とも生の事実，意識の事実そのものとして，果と道中を同時一体に己(おの)が全身として生きるか，あるいは，自から道をその道程も果も両ながらに無化し，否定し去って狂い出るか，それとも総じて空しい分別の果(か)を実の如くに盲執して，それを，おのが身を安んずべき絶対至上の価値の屋舎とするか，又さもなくば，それを，自からそれと知らぬままに，愚痴，嘆きの火宅とするかである。

詩の四部は，吾我の死に至る消息である。そしてここに吾我滅却の壮絶な戦いが，現実の戦争のイメージと二重映しに展開されるが，遂にかの「姿なき虫」[20]，自佗相対の分別我は頓死し，「踏みにじられて無に帰する。」

四，

遂に死がやって来た。申分のない死が。

そして最後におれを解き放ってくれた，おれは死んだのだ。

（15行省略）

若者の，大人たちの，そしくおれの死体だ。

その煙はうずを巻き，黒々と空を染め，

ついにあたりは，夜のように，死のように地獄のように暗くなる。

おれは死んでいる。そして煙と泥にまみれ，墓のなかに踏みにじられ，無に帰する。

墓の黒く，すっぱい土の中に死んで踏まれて，無に帰する，死んで踏まれて，無に帰する，踏まれて無に帰する。

先に我々は，主人公のこの様な死を，「吾我の滅却」という言葉で呼ん

だが，ここで暫らく右の詩行中の「踏みにじられて」という表現に注意したいと思う。我々が自我の滅却という場合，滅却には，滅却する対象としての吾我があり，又，それの滅却という意味でやがて滅却の主体なる自己が立ち，当然その自己の側よりする働き，造作が合意されるが，「踏みにじられる」という表現には，この場合「踏みにじられる吾我」は立っても，踏みにじる主体が立たない。主人公自身においては，唯あげて吾我なるわれが踏みにじられるという事実が，絶対的な消息があるばかりである。踏みにじられるわれに対して，踏みにじるわれがあるのではなく，踏みにじられるわれは，常に徹底受身である。全くの受容があるばかりである。そこにはわれの側よりの造作は絶無である。「死する」のも彼の意志，意欲してのことではない。吾我のおのずからなる転換である。踏みにじられた処が直ちに「無」の当処である。自我の滅却とは，既にこの「踏みぬかれる」の成就した処。そしてこの成就している処から，なお「踏みにじられる」という働きの只中に出て，そこから滅却の自我を返りみるとき，自我の滅却という方向が得られる。また，滅却の自我の処から見るときは，その滅却は，自我が本来滅却のものという意味をもつ。されば滅却された自我と滅却ということの成就とは，逐に同体にして別事ではないからである。

五

神よ，だが死んで，踏みにじられてそれでいいのだ。
すっぱい死の土に踏まれて，無に帰して，
全くの無に帰して
絶対の無に帰して
無
無
無
なぜなら，それが全くの，全くの無となるとき，それは，すべてでもある。
おれがトコトンまで踏みにじられ，踏み抜かれ，
あらゆる痕跡を失なうとき，おれはここに

立上り，復活を成就する。
再び生まれるのではなく，もとのままの身体で立ち上がるのだ。
新らしさの観念を超えて新らしく，生命を超えて生き生きと，
わずかな，かすかな誇りの想念を超えて誇らかに，
生命がかって一度も夢想され，暗示されたこともないあたり
この別世界に生き，なおもその身は昔と同じ地上のままで
しかも言いようもなく新らしく立ち上るのだ。

この第5部で注目すべきところのことは，「全くの無」，「絶対の無」から更に無が三度重ねられているということで，これにより吾我の徹底的な死が告げられるのであるが，これは同時にどこまでも「踏みにじられて，それでいいのだ」とする手ばなしの受け入れであって，自己の放下の徹底でもある。己れの側よらする一切の計らいが放擲されて，ただ踏みにじられるがままをよろこぶ。「全くの，全くの無となるとき，それはすべてでもある。「己れなし己れならざるなし」一切が放ち忘られるところ，そのすべてが口に満つるのである。しかも死んで，無に帰して，「あらゆる痕跡を失なう時」，おれは立上るのであるが，復活とはいえ，「再び生まれるのではなく」，「ここに」，この「もとのままの身体で立ち上る」のである。その身は昔と同じ地上のままで，しかも尚いいようもなく新らしく立ち上がるのである。そこは，生命が想念化されることも，実存の思弁化されることもなく，唯その想念化，思弁化のその働きの事実そのものを直ちにおのが生命とも実存ともする別世界である。別世界ではあるが，それが古い地上，古いこの身，この自我を寸分も離れたものではない。古い地上は本来がそのままで別世界であり，別世界また，この古い地上をおいてない。唯，古い地上は，我々の吾我が，その器量の丈を背伸びして描いたところの結果であって，それ自体，同じ別世界を離れぬとはいえ，ほんの心意識界隈を綾なす影に過ぎぬが，吾我のその「果」を産む働きそのものは，その「果」に証拠されつつ，「果」に先立ち，果の当処，働きを直ちにおのが体として，常に全体を，一切を一滴の露に尽すのであって，これが即ちロ

・レンスの呼んで新らしい天地となすところのものである。

六

黒く，すっぱい墓の中で，おれは踏みにじられ，絶対の死に至り
ある夜，その夜におのが手を差しのべた。するとその手は，
確かにおれでないものに触れた
確かにそれは，おれでないものだった
おれのそれまで居た所は突然焔に
突然，めらめらと燃え上る焔となった
そこでおれは更にもう少し手をのばしてみた
するとおれは，おれでないものを感じた
それは確かにおれではなかった
それは未知なるものであった。

そうだ，おれは燃えたつ焔，
くだけて日光を化す虎であった。
おれは，貪欲だった，おれは狂気のように未知のものを探しもとめた。
おれは新らしく立ち上り，復活し，飢えて墓を出た
飢えてたえず，むさぼり食う生を抜け出て，
今おれは，ここに新らしく目覚めて立ったそしてその手をのべて
未知に触れた，真の未知に，未知の未知に触れた。

以上は，第6部の最初の二連である。ここは詩全体のいわば要をなす部分であって，その語るところは，「他者」と「未知なるもの」の発見とその手続きである。吾我が全くの無に帰したところ，それまでも，また今も「飢えて絶えず己れをむさぼり食ってきた」おれは，「幽鬼」[21]としてのその相貌をそのままに「確かにおれでないもの」，「未知なるもの」，「他者」であるというのである。それまでおれがおれ自身で染めあげられていた人間，草木の一切が，実はそのまま全くそのおれに関わらぬ。従来のおれ，そしてそのおれによって抽象化され，「互いに脱出のかなわぬ混合体」[22]としてあった古い地上の一切物が，吾我の死の処に一斉に抽象化，思惟化される

以前の物が，意識の属客に堕せず，意識はただ意識分別するばかりで，物を果として俎上にせず，物もまた意識の働きの只中にその働きの事実そのものとして現起し，それを直ちに自己の本来性の現証とする底の，いわば物それ自体の全き姿を現わす。さればそれは従来のおのれと既に全く関りを持たぬ「燃える焔」であり，「日光と化せる虎」であって，一切の分別意識以前の「ある夜」，「無分別」，「未分化」にあって「手をさしのべる」乃至は働らくのである。それは自から未知なるものとして，未知，未分なる場にあって，「未知の未知」に触れる。そしてこの場合，未知なるわれも，未知なる場としての「ある夜」も「未知の未知」も手を差しのべるという純一な行為においてしかない。「燃えたつ焔」としてのおれは，「手を差しのべて」という働きにおいて焔たり得るし，それが触れたはずの「未知の未知」もまた手をさしのべたところにしかない。否，手をさしのべるという行為自体にしかない。そして更に，「そのこと」でしかない。「未知に触れた」ということも，「触れる」という焔の行為自体に既に「未知」はあるのである。おれはおれであって同時に，全くの他者，未知なるもの，そして直ちに焔としての働きである。そして一切物は，おれがおれと分別されるかぎりにおいて，そのおれと相対して，もの化され，すべてがおれの造作物と変ずるのであるが，われわれの死の当処には，すでにそれらは未知であり，焔としての未知であって，この焔のところにあっては，自己も一切物も，事実として未分一体のものであり，常に宇宙を，全体を尽して永劫燃えたつ焔なのである。

第6部は，次の第7部と共に，直ちに己が脚下におよび，重ねて現実の妻に同じ他者を指摘し，それまで専ら己れの意識の対象であり，ものでしかなかった妻のその脇腹が「恐るべき他者[23]」であることの驚異を語り，飢えて墓を出たのちの新らしい知識，新らしい時間の世界の語り難さを述べる。

七

それはわが妻の脇腹だった。

おれは墓から新らしく目覚めて立ち上りながら
手でそれに触れ，それをつかんだ
それはおれがむかし結婚した
妻のあの脇腹だった。
おれはその脇に千夜以上も寝ていたのだ
その間ずっと彼女はおれであった，おれであったのだ。
おれは彼女に触れた，触れたのはおれであった。触れられたのはおれであった

墓から立上り，黒い忘却からわが手を差しのべ
岩をつかむ溺死者の手のように，投げ出されたわが手を差しのべ
おれは彼女の脇腹に触れた，そして自分が死の流れに運ばれて
新らしい世界にいたり，岸によじのぼっているのを知った
こうして起き上ったのは，古い世界，古い変化のないおれ，古い生活ではなかった
目覚めたのは古い知識に対してではなく，新らしい大地，新らしいおれ，
新らしい知識，新らしい時間の世界に対してだった。

ああ，駄目だ，おれには，それが新らしい世界がどんなものか語ることが出来ない
あの狂をしい，驚くべき発見の喜びを語ることが出来ない。
おれは，それを語り終えないうちに，もう喜びに狂ってしまう。
おれのあとに来るものは，この新らしい世界のなかに，おれを，
この有頂点の狂人をみつけるだろう。

第8，最終部は，その別天地の風光とそこでの全き他者と他者の出会いを語る。そして最果ての生の忘却が自己を，そして他者を得る不思議な道であり，その道は，現実のこの女の不思議な盛上る胸，不思議な嶮しい斜面，白い平原（腹部）の他者につづく道である。

八
この新らしい世界の最奥の大陸から流れでる緑の流れ

それは，何であるか
緑に映えて永遠に旅ゆくもの
大陸の最奥部の神秘に溶けて
知識も忍耐も超え，新らしい世界の源頭から，かくも潤沢に流れ出る神秘に溶けて——
他者である彼女は，不思議な緑の目をもっている
白い砂，未知の果実，そして暗い海を越え，われらの通常の世界にまで，
絶えて吹き通うことのない香
脈搏の鼓動する国
愛にかたく閉ざされた谷間
わが最果ての忘却におち込む不思議な道——
あの他者である彼女はまた，不思議な盛り上がる胸を
不思議なけわしい斜面，白い平原をもっている。

「わが最果ての生の忘却に落ちこむ不思議な道」これこそ，まさしく「自己」が「他者」と出会う道なのであるが，同時にこれは忘却の道，自己忘却の道である。されば他者は自己忘却の，それも，本来総じて忘れられたるものという意味での自己忘却の道中で，はじめて出会われるものである。そしてその時，はじめて本来，われの分別我に，染まりも関わりもせぬ生の絶対的事実としての「彼女」の不思議な盛上る胸，「不思議なけわしい斜面」，「白い平原」によって，かの忘却の「自己」の，「他者」なる所以が証されるのである。そして

完全な生の盲目のはげしい忘却は，おれをとらえる
あの未知のはげしい至極の生の流れは，

おれを飲み，押し流し，
深みにある神秘の源泉までとらえていく
そこでおれの再生，復活した生の火を消し全き神秘の中核において，それを一層明るく燃え上らせる。

三

これで，ロレンスの初期の詩の一篇，「新らしい天地」の全体にわたって，一応読みわたしたのであるが，これでも既に知れるように，英文学中でも，ロレンスはブレイク[24]と並んで「否定」「理性」「理智」を自他，善悪，是非，生死等一切の二元相対的判断を生む元凶として，処をかえ言葉を変えて断えず告発しつつ，一方で「血の知識」「無邪気さ」「未分化」「開華」「全人」などを説いて，「二次的自己[25]」に対する「本来の自己」を主張し，「おれ」なる自己の本来性即「他者」なるありようを明らかにすることにより，「一切がおれにてある古い神の死」を宣し，同時に自己の本来他者にてある事実を「本来の自己」と呼びまたそれを直ちに，神とも神性とも呼ぶことで，彼の呼んで「神」とか，宗教というものの根本性格を明らかにしているのである。ロレンスの語る神というのは，いかなる場合いも，超絶的，人格的な神ではない。それは，どこまでも，徹底自己という事実，自己本来の生の事実を出ない。

「神とは全宇宙の焔の生（the flame-life）である。多彩な焔，あらゆる色彩と美と苦悩と幽愁[26]のすべてである」，「人が若し純一な関係性，個多にして一なるそのありようの純一な輝きである時，人は，神の未生以前の処に創られし神である。[27]」（傍点筆者）

「神は，二つの永遠の間の純一な関係である。これは，流れつどい，流れ去るその最中（さなか）である。」「而今の神秘にして，創造的神秘，又，われわれの呼んで神性となすところのもの[28]」，これが，直ちに「至上の神，即ち宇宙の中核に横たわる不可測なる生の神秘」にして「全き独一なる自己」の神秘なのである。ロレンスにとって宗教は常に自己の問題であり，この自己をはなれて神はない。さればこの「新らしい天地」あるいは，それよりも更に明確に，自己と他者の関係を歌い出ている同じ詩集中の「宣言書」，また，「ひなげしや飛魚をはなれて神は無い。歌うたう男，日をあびて髪をくしけずる女をおいて神はない[29]」という「最後の詩集」中の「神の肉体」など，孰れも，神はこの生身（なまみ）の自己，この肉に出て，はじめて神であり，

その神は，真の自己，「本来の自己」，「万象のすべてとの生ける末分一体のもの」，「われわれのうちに，われわれに先立ってある」ところの「自己という交換のかなわぬ独一なる創造の神秘」をおいてなしとする宗教のいわば極則の開演なのである。

〔註〕

(1) "The New Heaven and Earth", 詩集 *Look! We Have Come Through!* の一篇。1915年1月から7月の間にサセックスのグレアサムで書かれたもの。「宣言書」"Manifesto" と共にロレンスの当時における宗教的転向の内部消息を伝える傑作。

(2) 詩集 *Look!* の解題に曰く。「愛と男の世界のいくたの闘いと敗北ののち，主人公は既婚の女と運命をともにすることとなる。ふたりはあいたずさえて他国にはしる。女はやむえず子供をあとにのこす。愛と憎しみの闘いが，この男と女，そしてこのふたりと，ふたりをとり巻く世界のあいだに，いちおうの結着をみるまでつづく。」

(3) ロレンスに，「真実の思想，議論でない単一な思想はただ韻文，あるいは詩的形態の中にのみ生きることが出来る」の言葉あり。

(4) M. ハイデッガーの「存在は光を放ちつつことばとなる」—（存在自身がことばを囁る）—の「ことば」に同義。

(5) H. ベルグソン「哲学的直観」河野与一訳・岩波文庫版15頁の文意による。

(6) ロレンスは "The Proper Study", その他のエッセイの随所において「汝自身—汝自身の未知なる自己を知れ」といい，これをすべての芸術の最肝要事として主張する。(*Phoenix*, p. 716 参看)「自己の為の芸術」という彼の「標語」の内意もここにある。

(7) D. H. Lawrence; *Selected Literary Criticisim,* ed. Anthony Beal, W. Heinemann. 1955, "Hyms in a Man's Life", p. 8.

(8) 「『息子らと恋人たち』への序」という表題をもつ一文で，現在ロレンスの書簡集中に編入されている。

The Letters of D. H. Lawrence, ed. A. Huxley., Heinemann, 1932, pp. 95～102.

(9) "The Crown" ロレンスの雑論集「山嵐の死に関する随想」中に収録されているエッセイで6章100頁に及ぶ。

(10) ロレンスの作家論として最も長大且つ異色のもの。評論集，「不死鳥」中に含まれる。

(11) "The American Edition of New Poems, by D. H. Lawrence" という一文で *Phoenix,* pp. 218～222。ロレンスの数少ない詩論の一つにして時間論

を含む。

(12) ドストエフスキーは「地下生活者」の中で「けっして地下生活が一番いいのではなくて，わたしの渇望しているのはなにかしら別なもの，まるっきり別なものだということを，2×2＝4という程はっきり知っているからだ。ただそれがどうしても発見出来ないのである。地下などくそ食らえだ！」といっている。

(13) ニーチエは「喜ばしき科学」の中で「わたしは神をさがしている」と叫ぶ狂人の口を通して神の死を告知すると同時に，同じ狂人をして「われわれが神を殺してしまったのだ—おまえたちとわたしが。われわれはみな神の殺害者なのだ」と叫ばしめている。

(14) この個所の原文を示すと，

"I could cry with joy, because I am in the world, just ventured in.
I could cry with joy, and quite freely, there is nobody to know."

(15) 方丈記（岩波文庫版71頁)「夫三界は只心ひとつなり，心若やすからずは，象馬七珍もよしなく，宮殿楼閣ものぞみなし。」我々の生きている現実の全体を表わす欲，色，無色の三界。この場合の「心」は前後関係から六識乃至七識の境界をさす。

(16) *Phoenix* 中の一文，"Climbing down Pisgah" 参看。

(17) ハイデッガーはヨーロッパの歴史を「存在忘却の歴史」とよび，また現代はヨーロッパ形而上学の完成期で終焉であるといい，彼自からの「転回」をヨーロッパ存在史の転回とみなした。

(18) 唐木順三「詩と哲学の間」創文社頁29—33参照。

(19) 「山嵐の死に関する随想」中の一文"Him with His Tail in His mouth" 参看。

(20) W・ブレイク，*Songs of Experience*,"The Sick Rose" の中の語 "The invisible worm"。生命の樹を蚕食し，叡智の樹を蝕む相対的意識である「自我」をさすとされる。

(21) これもブレイクの語で「吾我」の象徴 "the spectrous fiend"。

(22) 詩「宣言書」中の表現。"A mixture, unresolved, unextricated one from the other"

(23) "the terrible *other*"「宣言書」中の句。

(24) ブレイクの次の詩行を看よ。

The Negation is the Spectre, the Reasoning power in man :
This is a false Body, an Incrustration over my Immortal
Spirit, a Selfhood which must be put off and annihilated away.
"Milton", 42, 34—36.

(25) "the secondary consciousness" これと同義に "the self-conscious ego",

"the spirit", "the self-aware of itself" など十数の句が用いられる。「本来の自己」は "the primary self"

(26) *The Later D. H. Lawrence,* p.201

(27) D. H. Lawrence *Reflections on the Death of a Porcupine,* Indiana Univ. Press, p.94.

(28) *The Symbolic Meaning,* p. 28

(29) "The Body of God", *Last Poems.*